

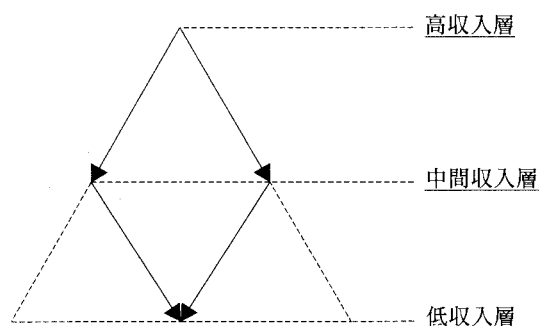
の問題はますます深刻になりつつである。下崗工の人数は各統計データで差異があるが、中国国家统计局のデータによると、約1千万人である。全国总工会（組合連合会）の統計データによると、約3千万人である。この貧困層の主体は改革の中である既得利益を失った人——たとえば「鉄飯碗」の人である。彼らが想像もしなかったのは改革によって自分自身の既得利益に影響を及ぼしている。この貧困層は中心都市部にあり、社会安定に与えた影響はもっとも大きい。現在、都市でストライキしているのはほとんどこの層の人たちである。中国の各都市では、特に不景気工業が多い都市では、下崗工の問題と再就職の問題を最優先の課題として認識している。沢山の新しいサービス業を作り出し、この問題を解決しようとしている。下崗工になった従業員は意識変革という問題が存在している。あまりサービス業に行きたくない、そういう職業は格が一段落ちると古い観念を持っている。

第四は、都市に入った出稼ぎ農民労働者の貧困層である。現在、中国大陸の都市に出稼ぎ農民労働者数は1億人ぐらいいる。北京市内には330万人がいる。都市の人がやりたくない仕事はすべて出稼ぎ農民労働者たちがやっている。現在、北京はこれらの農民労働者がいなければ、困る状態になっている。彼らの中は裕福層に入った人は少数に過ぎない。大多数は貧困層にいる。条件の悪い都市周辺地に住んでいる。故郷の省の名前で住んでいるところを名を付けたりする。たとえば北京の「浙江村」、「河南村」、「新疆村」などである。彼らは都市の周辺集団である。彼らは社会の安定に与える影響はそれほど大きくないが、都市の下崗工従業員のような既得利益の喪失者ではなく、反対に、彼らは受益者である。都市と農村の格差が大きい二重構造の中で、農村より都市の方はチャンスが多い、金を稼ぎやすい面がある。そして、一定の技術を身につけることができ、都市人になるチャンスがあり、いろいろな方法で自分の子供を都市で教育を受けさせようとしている。したがって、彼らは現行政策の支持者である。しかし、彼らが都市の治安、犯罪率の上昇にもたらした影響が大きい。盗難事件はほとんど彼らが犯した。沢山の犯罪（動機）例の中で一つ注目すべき

点は、都市に入って初めて都市の人の生活がこんな素晴らしいと知ったが、過去はぜんぜん知らなかったということである。

第五は、実際に貧困層に属していないのに、相対剝奪感を持ち、自分を相対貧困層に入れている社会集団である。「相対剝奪感」とは、自分の貢献と支払った部分は報奨と収入との格差がアンバランスであると感じていること、被剝奪の感覚を持っていることを指す。中国大陸の知識人は、「易くて品がよい」（価廉物美）という美称がある。易いというのは、給料の低収入体制と少ない収入である。たとえば大学教師の収入は数十ドルから百ドル、二百ドルまでである。品がよいというのは、素質が高い、奉仕の精神があることを意味する。彼らの貢献と報奨は正比例になっていない。私営企業者と海外の大学教師と比べたら、ますます失落感を抱えてしまう。このような収入状況は、海外に派遣した中国留学生の帰国に影響を与えている。もう一つは定年後の老人集団である。彼らが職場で働いていたとき、社会に貢献したときの収入水準は現在より低かったので、定年時にそれに相応した補償を得られなかった。もし貯蓄が少なかったとしても、近年のインフレによって、大分使い果てただろう。彼らの相対剝奪感をもっと強烈であるかも知れない。このような剝奪感を持つと、主観的に自分を貧困層に入れてしまう。あれこれの不満と意見を持ち、社会安定に与える一種の潜在的な要素である。

社会学の見地から、一つの安定した利益構造は、収入の角度で見ると、菱形で示すことができるが、不安定の構造は三角型で示すことができる。



社会利益構造の安定と不安定の示唆図